

NBS



第15回 日本排尿機能学会

The 15th Annual Meeting of the Neurogenic Bladder Society.

プログラム・抄録集

Back to the future: What is new in continence medicine?



■会期 2008年9月11日(木)・12日(金)・13日(土)

■会場 大手町サンケイプラザ
東京都千代田区大手町1-7-2

■会長 本間 之夫 (東京大学医学部泌尿器科)

日排尿会誌
NBS

日本排尿機能学会誌
第19巻第1号 2008

人施設における排泄管理マニュアル導入の有 性

古屋大学大学院医学部系研究科泌尿器科学、
牧市民病院

奥村 敬子¹、吉川 羊子²、浅井 健太郎¹、
松川 宜久¹、後藤 百万¹

的：適切な排尿管理を必要とする膨大な数の高齢
に対し、広く適切な排尿管理を実践するために、
高齢者介護・看護を実際に担当する一般介護者ある
は介護・看護専門職向けの指針の作成が不可欠で
る。今回、平成14年に作成した介護・看護者向け
高齢者排泄ケアマニュアルを老人施設に導入し、
の有用性を検討した。方法：老人保健施設1施設、
別養護老人ホーム2施設の3施設で、平成17年10月
から平成18年1月の4ヶ月間、各施設に排泄ケアマ
ニュアルを導入し、対象者を選定してマニュアルに沿
った排尿障害の評価・対処を行い、有用性を検討。
毎に評価・対処の前後で症例票の検討項目に記
し、試験終了後に回収。マニュアル導入に先立
、各施設職員に対して、マニュアルの説明および
高齢者排尿障害の病態・診断・対処に関する講義を
行った。結果：施設の各担当者が29例（男性4例、
女性25例、平均87歳：78-99歳）に対して、排尿日
、排尿チェック票による評価を行い、マニュアル
沿った排尿管理を行った。尿失禁消失、あるいは
むづがし得られた症例を「著効」、それ以外
排尿状態の改善が得られた症例を「有効」、変化
なかった症例を「無効」と定義して検討した。全
施設における成績は、著効20.7%、有効20.7%、無
効58.6%。施設内に排泄委員会を立ち上げ、泌尿器
専門医が教育的介入を行った施設では、著効33.3
%、有効50%、無効16.7%、「介入なし」の施設で
著効17.4%、有効13%、無効69.6%と「介入有り」
施設において、より高い有効性が得られた。
DL、要介護度と効果の関係では、ADL障害が高
なほど、また介護度の高いほど有効性が不良にな
る傾向がみられた。結論：高齢者排泄ケアマニ
ュアルの老人施設への導入は、41%で排尿状態の改善が
られ、有用であることが示され、特に泌尿器科専
門医が持続的な教育的介入を行うと83%に有効な結
果が得られた。マニュアルの適切な使用方法について
啓発や訓練、マニュアルに沿った排尿管理ができ
ような現場環境をどのように整えていくかの検討
今後必要である。

北九州病院方式オムツ外しスコアによる合理的 な尿路管理；要介護高齢者321例のアウトカム

¹北九古賀病院・泌尿器科・排泄管理指導室、
²北九州古賀病院・排泄管理指導室・看護部

岩坪 暎二¹、八木 廣朗¹、永沼 真由美²

「目的」要介護高齢者の排尿管理を合理的に行うた
め、膀胱機能をスコアで評価し、排泄自立能力（尿
意伝達とADL能力）と組み合わせる取り組み効果
を予測する北九州病院方式オムツ外しスコア化を提
唱（既報）してきたが、要介護高齢者321例の結果
と有用性を報告する。「対象と方法」新患入院した
要介護高齢者で排泄管理を必要とする321例（男120
名、女201：年齢82.0±10.3歳）主病は脳傷病43%、
ADL傷病46%、認知症52%、である。例排尿記録、
或いは1時間毎のオムツチェック法（24時間連続）
により、(1)平均排尿量(2)平均残尿量(3)排尿
回数で膀胱機能を正常(スコア3)、低下(2,1)、
廃絶(0)と分類し、尿意伝達(できる1点、出来な
い0点)、トイレ動作(できる2点、声掛け・誘導で
出来る1点、出来ない0点)と評価した。それらの合
計=オムツ外しスコア(6点~0点)予測をもとに1
ヶ月間介護に取り組んだ。「結果」1、膀胱機能正常
51(16%)例、低下188(58%)、廃絶82(25%)で
あった。2、排尿自立能力(尿意伝達+トイレ動作)
は、スコア3点23例(7%)、2点84例(26%)、1点68
例(21%)、0点147例(46%)であった。3、1ヶ月
後の排尿管理法は、自立29例(9%)、パッド73
(23%)、夜のみオムツ55(17%)、昼夜オムツ150
(47%)、間欠導尿8、留置カテ3、その他3例とな
った。4、クロス集計でみる膀胱機能と排尿自立能力
の関係は排泄管理法の結果と有意に関連した。「考
察」要介護高齢者の1時間毎オムツチェックは数量
的に膀胱機能(排尿量、残尿率)を把握でき、個々
の症例毎に一定で数値化・グラフ化でき、従来の
「排尿パターンの把握」は無意味で、膀胱機能しか
便りにできない。「結論」オムツ使用者の排尿評価
と対策に1時間毎オムツチェック(1日間)による膀
胱機能(排尿量、残尿量)把握は、排泄自立能力と
組み合わせた「北九州病院方式オムツ外しスコア
化」で合理的な排泄管理を可能にし、介護者・被介
護者の負担を軽減できる。